



# No.130



わくわく工房 (わくわく祖師谷)



透明板で遮断しての学習風景 (金町学園)



令和4年2月移転予定の新施設『アレーズ秋桜』  
イメージ図 (金町学園)



出張販売 (わくわく祖師谷)

## INDEX

令和2年度第3回総会 報告 …………… 2	人権擁護委員会「じんけんBoard」 …………… 6
本人部会 報告 …………… 3	施設紹介「金町学園」 …………… 8
虐待防止・権利擁護研修 報告 …………… 4	施設紹介「わくわく祖師谷」 …………… 9
保健医療スタッフ会学習会 報告 …………… 5	リレーコラム、編集後記 …………… 10

●発行者 知的発達障害部会 部会長 小池 朗 ●編集 知的発達障害部会 広報委員会

●発行所  **東京都社会福祉協議会**

〒162-8953 東京都新宿区神楽河岸1-1 TEL 03-3268-7174 FAX 03-3268-0635

●東社協ホームページ (<http://www.tcsw.tvac.or.jp/>) からご覧いただけます。

# 知的発達障害部会 令和2年度 第3回総会

広報委員 京地 正純（葛飾通勤寮）

年明け早々に都内をはじめ、多くの都府県にて緊急事態宣言が発令され、まだまだコロナによる影響が社会の至るところで見られています。東社協の知的発達障害部会でも、第3回総会は前回同様、webでの配信となりました。本総会は、知的発達障害部会の会員ホームページより、第一部「議決事項」、「報告事項」、第二部「令和3年度報酬改定に関する講演について」を2月8日（月）～2月14日（日）に動画にて配信。第二部の「行政説明」については、2月8日（月）11時からzoomウェビナーを使用しライブ配信させていただきました。また、議決事項については、文書審議にて決議を取らせていただきました。

「議決事項」としましては、「令和2年度補正予算（案）について」、「令和3年度部会費の徴収について」、「令和3年度役員体制および事業計画（案）について」、「令和3年度予算（案）について」といった4つの議案について配信にて皆様に説明をさせていただきました。

令和2年度補正予算（案）、令和3年度予算（案）につきましては、「令和2年度施設部会特別活動拠点区分（知的発達障害部会）補正予算（案）」、「令和3年度施設部会特別活動拠点区分（知的発達障害部会）予算（案）」を元に説明があり、コロナウイルス感染症拡大にともない、役員会や研修の開催が難しく、令和2年度については大きく補正が必要となり、また令和3年度についてもそういったことを加味し予算を作成する運びとなったこと説明がありました。

令和3年度部会費の徴収については、新型コロナウイルス感染症の拡大により、令和3年度に限

り、知的発達障害部会会費の徴収額は、本部会規程の第14条第2項に定められる部会費徴収基準により算出された額を、一律25%減額した額として議案として挙げさせていただきました。

また、令和3年度役員体制および事業計画（案）について、各代表者より説明があり、令和3年度もまだ先の見えない中ではありますが、今後の活動等について挙げさせていただきました。

行政説明については、東京都福祉保健局 障害者施策推進部 施策サービス支援課の方々より東京都における障害関係施策について、「令和3年度予算案のポイント」、「基準条例改正・報酬改定について」、「主要事業について」、「連絡事項について」、説明していただきました。

令和3年度報酬改定に関する講演については、社会福祉法人南風会 常任理事 山下 望氏にご講演いただきました。12月17日の予算大臣折衝を踏まえ、報酬改定における主要事項として、相談支援を提供するための報酬体系の見直しをはじめとし、それぞれの項目について大変わかりやすく説明していただきました。貴重なお話ありがとうございました。

本年度はコロナウイルスの流行にともない、なかなか活動も難しい一年となりましたが、来年度は「withコロナ」として、この状況の中での部会活動がより活発になっていくことができると感じました。

# 本人部会に関わって考えること ～利用者に寄り添うということ～ オムニバス

本人部会支援委員長 宮本 浩史

私の胸の名札に「nothing about us without us」と書いた黄色いリボンがついています。「私たち抜きに私たちのことを決めるな」という例のあれです。当たり前のことですが、わざわざ宣言しなければならないほど障害福祉の世界は、私のことは私が決めるということが当たり前ではないのでしょうか。

本人部会をお手伝いして久しいのですが、当事者の意見を引き出すことができているのか、という葛藤にいつも追われています。「本当はどう思っているのですか」「本音はそこですか」と。

本人部会で、障害者虐待がテーマとなり話し合ったことがあります。津久井やまゆり園の事件をみんなが憂い、お見舞いの色紙をお送りしました。ご自身の体験として虐待を受けたことがあるか尋ねるとどなたもおられません。けれど、叩かれたことはありませんか？意地悪をされて嫌な思いをしたことはありませんか。いじめられた経験はありませんか、と尋ね直すとぼつぼつと手が上がります。詳しく聞こうとすると「終わったことだから・・・」「おぼえていない・・・」「私もわるかったから・・・」と濁します。

毎回本人部会の開催に当たっては、レジュメを作ってお渡ししています。前月のまとめと今月の議題、その資料などを記していました。「きちんと」フリガナを振ってわかりやすくしていたつもりでしたが、文字の読める方にも評判が芳しくありません。のちに、文字はすべてひらがなに、単語間にスペースを入れ文章は「平易で短く」しました。「初めから、こうすればよかったのに」と言われました。

ヘルプマーク、ヘルプカードの勉強会を開いたことがあります。ヘルプカードの意味、使い方、理解促進について、ゲストが演じる利用場面ごとの演劇に大きな期待をしました。ところが数か月

後、乗り越したバス内で運転手にヘルプカードを提示したところ、全く相手にされず、かえって嫌な思いをし、困ったという報告がありました。

いくつかの事業所で、事業計画を立ててきましたが「こんな計画を立ててみたいが、いかがでしょうか」とか「みなさんの意見を反映した計画を作ります」とか言った利用者の意見を直接事業計画に反映させたということは、恥ずかしながらありません。もちろん、出来上がった事業計画のダイジェストは年度初めにご説明します。宿泊旅行やお祭りのような行事にも計画から参加していただきます。個別支援計画は、利用者自身の希望や夢を伺うのに、いまだに自分の事業所の事業計画作成には参加できていません。「nothing about us without us」

「ちゃん」呼びが「さん」呼びに替わり、親が押していたハンコを本人が押すようになり、各地で開かれる協議会や検討会に当事者として参加する機会が増えてきました。パラリンピックの代表的知的障害者が紹介されることが稀ではなくなってきたけれど、それでも今隣で微笑んでいる利用者には、本気でより添えていないのかもしれない。



10月に飯田橋で本人部会を開催しましたが、その後は開催ができず、コロナ禍での活動方法を模索中です。

## 令和2年度第1回

# 虐待防止・権利擁護研修報告

人権擁護委員会 松下 功一



令和2年12月11日(金)に人権擁護委員会主催、初のオンライン研修会が開催されました。募集開始からわずか2日で定員の70名に達し、関心の高さを改めて実感しました。都研修は

倍率が高くなかなか受講決定に至らないため、その一助になればと昨年度から通算3回目の開催です。

「障害者虐待防止法の理解と虐待事案について」と題し、五百蔵洋一法律事務所の関哉直人弁護士にご講義いただきました。法律の概要、目的、虐待の内容(身体的・性的・心理的・ネグレクト・経済的)、身体拘束の例や手続き要件、早期発見義務、通報義務のご説明の後、報道事例のご紹介がありました。

そして講義は「虐待防止のポイント」へ進みます。虐待は、①密室の環境下で行われる。②障害者の権利を侵害する「小さな出来事」から心身に傷を負わせる行為にまで次第にエスカレートしていく。③職員に行動障害などに対する専門的な知識や技術が無い場合に起こりやすい、という共通の構図があります。「小さな出来事」がエスカレートする理由は、①限定された社会内での依存した関係、②意思表示が困難な特性、③現場での自由度が高い(支援には正解がない)、という点が挙げられ、エスカレートを止める外的要因が少ないため、個々の認識・意識が非常に重要と関哉先生

はおっしゃいました。小さな出来事は薄いグレーから濃いグレーへエスカレートしていきます。「虐待が『尊厳』を害するものであり、『自立及び社会参加』にとって虐待を防止することが極めて重大である」という障害者虐待防止法の目的に「常に立ち返るように」と強調されました。11の「小さな出来事」の例を一つ一つ解説され、グループワークへと進みます。ZOOMのブレイクアウトセッション機能を使って3~5人のグループで「小さな出来事(権利擁護)を共有する取組み」として話し合うと、受講者のみなさんは積極的に発言されていました。

小さな出来事を共有する目的は、現場の支援をより良いものにすることです。日常から支援について話をする習慣のある職場が「風通しのいい職場」です。根拠のある支援、次につながる支援、本人中心の支援を経て、支援に自信が持てる職場になります。いろいろな考え方や価値観を上司や同僚が受け止めてくれ、吸い上げてくれる職場は支え合える職場になります。

「久しぶりによその施設の人と話した」と書かれたアンケートを読み返し、この研修を継続していく必要性を強く感じました。

# 越境とかけはしー保健医療スタッフ会の学習会

保健医療スタッフ会 代表幹事 林 武文

福祉の現場では、保健医療スタッフの考えが支援スタッフに伝わっていないと感じることがあります。利用者さんの健康と安全を保障したいという共通の思いがあるにも関わらず、うまくいかずに悩むことはないでしょうか。そんな保健医療スタッフのモヤモヤを何とかしたい。医療職と支援スタッフとの間にある齟齬や軋轢を減らしたい。対立ではなく協力し合える関係を作りたい。このような課題に正面から向き合い、それぞれの現場を支えるのが保健医療スタッフ会幹事の役割だと思っています。

これまでの学習会は、支援現場で対応に苦慮していることをテーマに企画してきました。湿潤療法、下剤に頼らない排泄支援、多飲水・水中毒の支援等々です。しかし、保健医療スタッフの専門性を高めるだけでは、支援スタッフとの溝は埋まりません。

私たちが支援スタッフへ抱く不満はまた、支援スタッフが私たちに抱く不満かもしれません。こんな話を繰り返すうちに、支援スタッフが医療に明るくないように、私たちもまた福祉について理解が不足しているのではないかと考えるようになりました。

知的障害福祉分野での私たち保健医療スタッフ

の仕事って何でしょうか。医師の指示にもとづく病院看護とは違って、現場での看護判断が求められる仕事。医療機器もわずかで実施できる医療処置が限られているなかで最善を期待される仕事。利用者の身体面だけでなく、精神症状、発達段階、障害特性、アディクションや生きづらさなどの精神面のケアも求められる仕事。加えて、障害や疾患を抱えて生きる人たちが安心して暮らせる社会のあり方を考える仕事。私たちの仕事は、実に考えることの多い、責任ある大変な仕事です。

「医学モデルから社会モデルへ」。WHOの国際生活機能分類や国連障害者権利条約で、障害観は大きく変わりました。一方で新型コロナウイルス感染症の流行は、医学モデルでの支援の重要性をあらためて示しました。しかしパンデミックはいつか終息します。流行が収まっていくにしたがって、医学モデルだけでは支援できなくなります。私たち保健医療スタッフは、医学モデルと社会モデルの双方をつなぐことができる職種ではないでしょうか。そのためにも、私たちの仕事の意味を考える学習会を今後も企画したいと思います。保健医療、支援、調理、事務と、スタッフの職種にかかわらず一緒に学び、語り合っていきたいと考えています。



1月30日、初のオンライン学習会を開催しました。

# じんけん Board



わたしの



支援を通した利用者とのかかわり、ご家族との会話の中や地域の方などが集まる場所で偶然出会う瞬間に、「ニヤリ」としたり心が温かくなったりすることがあります。自分だけのものにしておくのは「もったいない」ので、「ホッと」な気持ちが広がっていくように書き留めてみました。

忙しい日々の中でも「お待たせしてごめんなさい」「教えてくれてありがとうございます」等丁寧に利用者へ声掛けをしている職員をいつも素敵だなと思い、見習ってみたいです。

「最近転倒が多いんだって!」と、ご利用者が言っていました。ヒヤリハットや事故について、利用者懇談会で丁寧に説明しているからこそ、ちゃんと伝わっているんだなと思いました。

根気強い支援で、昨年度は活動中いつも床に座っていたご利用者が1人で箸作業を行えるようになりました。初めの頃は隣に座って声を掛けながら行い、徐々に席に促すだけで、1人で作業を行えるようになり、終わったら自分で片付けも出来る様になりました。

コロナ禍の中ですが何か企画を!と施設内でカレー作りをしました。自分で作る喜びや、仲間と一緒に時間を共有する楽しさを味わったご利用者は、とても良い表情をされていました。

外出で公園に行った際に、ある職員が竹トンボを持参されてご利用者と一緒に楽しんでおられました。皆さんあまりやったことが無いようで興味津々で遊んでおり、笑顔が多く見られました。ご利用者が楽しめるように工夫する事の大切さを学ばせて頂きました。

腰の調子が悪い中、他職員に快く仕事を代わって頂きました。その後の「無理はしないように」の一言で気持ちが救われました。

活動時間で紙ちぎり以外なかなかできないご利用者が、職員の声掛けと工夫によりいつもと違う活動にチャレンジできました。

持病できびしい治療が必要になったご利用者に対し、治療をするか、しないかの選択を丁寧に提示していました。本人にわかる言葉で、だけどポイントはしっかり伝え、本人もはっきり自己選択することができました。ご利用者の人生の大きな節目に、しっかりと一緒に向き合っている姿勢が素晴らしかったです。

気分が落ちてしまった方を元気づけようと、その方が笑ってくれるように色んなポーズを披露しているご利用者がいました。とっても優しい性格にニヤリとしました。

支援者の皆さんが『自分の仕事を振り返る』『権利意識を高める』きっかけになればとの想いを込めた川柳のコーナーです。皆さまの投稿お待ちしております。

最優秀作品

やりたくない!

そんな日だって、

あるんです

作・ポムポム

作品背景

いつも作業に取り組んでくれる利用者さんに、いつも通り「お願いします」と頼んだところ「やりたくない」アピリをされました。結局、その利用者さんは他の作業を選択してしまいました。普段から当たり前のように入り組んでくれていたのが、当然のように箸作業をやってもらう流れを作りました。やりたくない日だってあるよな」と思い、「利用者さん自身に決めてもらう」大切さを実感しました。

優秀作品

相手へと

よかれよかれと

決めつけた

作・ハムスター

作品背景

自分の椅子を使用している利用者様がいて、とある日汚れてしまったため洗いました。「まだ、お日様出ているから日向で干しましょう!」と声かけ、日の当たる場所へ。職員がその方の椅子を運んだら「それは私の椅子!返して!!」と怒ってしまいました。ご自身で見える場所に干したかったそうです。反省です。

入選作品

感情

ふと戻ったら

反省を

作・花

作品背景

私達人間ですから、感情で色々左右されてしまうことがあります。特に私は感情的になりやすく、ついついやりすぎたなあ〜って思うことが度々。毎回反省会の日々です。

支援員

イヤヨイヤヨも

好きのうち

作・ちえき

作品背景

イヤイヤ言っている職員のことほど好き。

大きな声

気づいてほしい

心の叫び

作・ポムポム

作品背景

突然大きな声を出している利用者さんが居たので、大きな声を出して理由を教えてください。とこちらが話を聞き出すよという姿勢をみせたところ、大きな声を出すのを止めて、「〇〇されて嫌だったから」「〇〇したくないの」など、ポツリポツリと心の内を話してくれました。「大きな声」といっても、利用者さんによっては「支援者に気がついてほしいサイン」の場合もあるのだと思いました。

通じない

思った方から

「ありがとう」

作・enjoy54

作品背景

この利用者さんとは上手くコミュニケーションとれないな〜と感じていた利用者さんから、まさかの「ありがとう」という言葉をもらい、嬉しかった。

投稿おまちしております

読者の皆さまからの投稿をお待ちしています。

- ① 「わたしのニヤリ・ホッと」
- ② 「誰か教えて! 私の支援間違っていない?」
- ③ 「川柳ぼーど」

①②の投稿につきましては、紙面の都合上1,200字以内とさせていただきます。原則として原文のまま掲載いたしますが、場合によっては内容を損なわない範囲で加筆・修正させていただきます。尚、事例については、施設・個人名が特定できないようご配慮お願いいたします。

③の川柳のテーマは福祉に関係するものであれば構いません。

投稿は匿名でもお受けいたします(その旨記載してください)。手紙、FAX、メールとお好きな方法でお送りください。

手紙の場合

〒162-8953 東京都新宿区神楽河岸1-1  
社会福祉法人 東京都社会福祉協議会  
知的発達障害部会 人権擁護委員会 宛

FAXの場合

03-3268-0635  
知的発達障害部会 人権擁護委員会 宛

メールの場合

東京都社会福祉協議会 知的発達障害部会 事務局  
jido@tcsw.tvac.or.jp宛に「じんけんboard投稿」とタイトルをつけて送信してください。

## 施設紹介

# 新型コロナ禍での聴覚障害児入所施設 『東京愛育苑金町学園』

東京愛育苑金町学園は、福祉型障害児入所施設であるが、主たる対象を『聴覚障害のある児童』としている。その理由は、聴覚障害児のみ、コミュニケーション手段に視覚言語（手話、指文字、文字、絵や写真、イラスト等）を使用するからである。また、児童にとって重要な成人モデルである聴覚障害のある職員も採用しており、基本のコミュニケーション手段は手話を代表とする視覚言語がベースとなるからである。

東京愛育苑金町学園は、昭和8年にろうの子どもたちの職業学校の様な形で創設され、日本でも最長の歴史を持っている。老朽化による施設の建て替えも一因として、令和4年2月には、近くに新施設が建設され、経営法人も社会福祉法人永春会（本部は松戸市）に移管される。

聴覚障害児・者は、通常、相手の表情や口形を頼りに、残存聴力や補聴機器の助けを借りてコミュニケーションを成立させている。したがって、

今回の新型コロナウイルスは、マスクが最大、最強の防止策であるために、どこに居ても、『マスク、マスク、マスク、、、』で、聴覚障害児・者には非情な防止策となっている。学校が閉鎖された3か月以上もの間、施設に閉じ込められた生活は、入所児童にとって非常に過酷な状況であった。児童も職員もストレスが積み重なり、更に相乗してぎりぎりの状態まで追い込まれたと言っても過言ではない。事実、耐えかねて退職した職員も数名に上った。

秋になって、コロナと共生する道を探りながらも、ようやく学校も落ち着き、それに伴って施設での生活も落ち着きを取り戻しつつある。児童も職員も、夏にできなかった家族との面会や一時帰宅を、冬休み・お正月には実現できるようにと希求の日々を送っている。

東京愛育苑金町学園施設長 濱崎久美子



学習机も除菌



調理活動

# 施設紹介

## わくわく祖師谷

### 【事業所紹介】

わくわく祖師谷は、平成21年11月に砧保健福祉センター跡地を世田谷区から借り受け開所しました。世田谷区内で初めて生活介護と就労継続B型を一体的に行う多機能型事業所として誕生しました。平成31年2月には敷地内にカネゴン像が設置され、ウルトラマン商店街の新たな観光スポットとなっています。施設内では毎日パンを製造、販売しています。

### 【活動紹介】

B型では、「今できることを皆で協同して取り組む」ことを重視して作業支援及び生活支援を通じ地域との繋がりに重点を置き運営しています。作業は各種受託作業と自主製品としてパン・焼き菓子・手芸品を製造販売しています。パン販売は事業所店頭販売の他に区役所、砧総合支所、小田急線祖師ヶ谷大蔵駅など、地域に出る行く販売に力を入れています。

生活介護では、利用者個々人のストレングスに着目し、豊かな日常生活を送るため多様なサービスを提供しています。支援内容としては「創作的活動及び作業活動」「余暇活動」経験の場の拡大と社会体験の蓄積を図るため「一日外出」「宿泊体験」などをプログラムに取り入れています。

### 【多機能型としての取り組み】

生活介護利用者もB型が受託している作業の一部を行っています。また、店頭でのパン販売の売り子として接客を行うなど、B型の内容を一部取り入れたプログラムがあります。B型利用者は、短期入所利用時に生活介護の送迎に使える利便性により多くの方が短期入所を利用されています。

商店街の中にある多機能型施設として多くの方に必要とされる場であり続けるよう、楽しみながら頑張っています。近くにいらしゃいましたら、ぜひ、お立ち寄り下さい。



作業風景



販売品



B型 総合支所へ出張販売

新型コロナウイルスが猛威をふるう中、例年よりも時間は短縮となりましたが、今年も「介護等体験」の目的で学生の方々が実習に来てくださいました。毎年実習生の皆さんからはエネルギーに満ちた良い刺激をいただいているのですが、いつも来所されるボランティアの方々が活動を自粛され、人々とふれあう行事やイベント等も激減したコロナ元年、会話好きの利用者さんにとっては、いつになく特別な機会であったと思います。またそれは、実習生の皆さんにとっても同様のようで、利用者さんとのひと時をととても大切に受け止めていただいているご様子でした。皆さん、例年以上に緊張した面持ちでいらっしゃいましたが、利用者の方々と同じ作業をし、休み時間に流行の曲を

一緒に聴き、何気ない会話をしていくうちに徐々に笑みがこぼれていきました。時には、利用者さんからご家族の愚痴話が出ることもあり、感じ方は人それぞれですが、日常の喜怒哀楽がどこの世界にもあることを知っていただけたと思います。

利用者の皆さんは、今年は特に大変な状況の中で実習生の方々が来てくれたと感謝をし、最終日には「勉強がんばってね。」「いい先生になってね。」等と励ましの言葉で見送っていました。毎回、実習生の関心事や将来の方向性に合わせたエピソードを話すよう心掛けていますが、実体験に勝るものはありません。withコロナの時代も、ウィンウィンの関係を変わりなく継続していけたらと思います。

## 編集後記

今年度は、新型コロナウイルスの感染拡大により、社会の中でも自粛が相次ぎ大変慌ただしく過ぎた一年間であったと感じています。ただ、どんなに社会が変わろうと私達の福祉・支援は続いていきます。コロナ「だから」仕方がないではなく、コロナの中で「どうやってできるのか」を考え、また来年度も支援に励んでいきたいと思えます。また、東社協「かがやき」から、少しでも明るい話題を皆さまにお届けしていくことができたらと感じています。

(葛飾通勤寮 京地)